

報告1

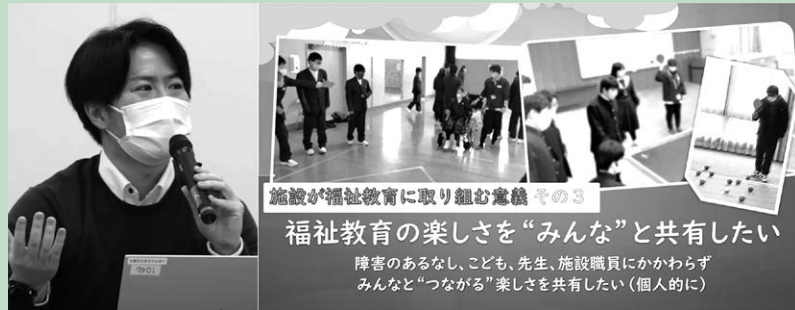
地域とつながるキッカケ —小学生の登校の見守りから—



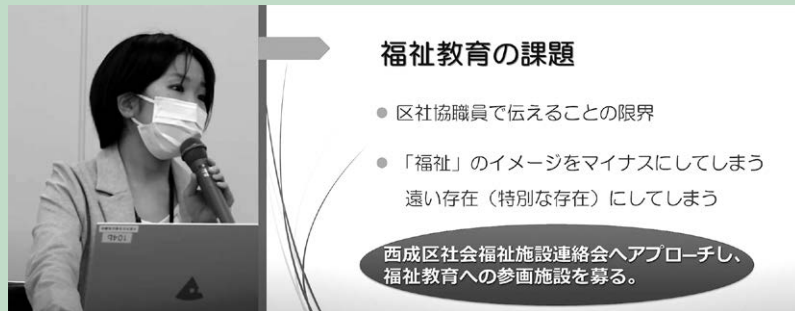
社会福祉法人優心会 特別養護老人ホームこうのとり施設長
北野 智傑さん

報告2

施設・区社協の協働による 学校での福祉教育の推進



社会福祉法人ヒューマンライツ福祉協会 大阪市中部地域障がい者就業・生活支援センター長
山脇 功次さん



社会福祉法人大阪市西成区社会福祉協議会 地域支援担当
由浅 悠さん



「当日参加できなかった施設職員にも見てほしい」「施設内の研修や、区の連絡会などでも活用を」「社協職員の実践のヒントに」との思いで、学習会の配信内容を編集した動画を公開することとなりました。詳しくはリンク先から！

<https://sisetsukyo.osaka-sishakyo.jp/post-training/isk/>

学習会の動画が
HPから
視聴できます！

んなで楽しさを共有できる」という3点を示しました。

一方、西成区社協で福祉教育を担当する由浅悠さんは「区社協職員だけで伝えられることには限界がある。逆に福祉のイメージを『自分とは遠いもの』にしてしまうおそれもある」と、区社協として、当事者に近い社会福祉施設と協働する意義を話しました。他の施設の参画も広げていくため、令和3年

福祉は「笑顔づくり」

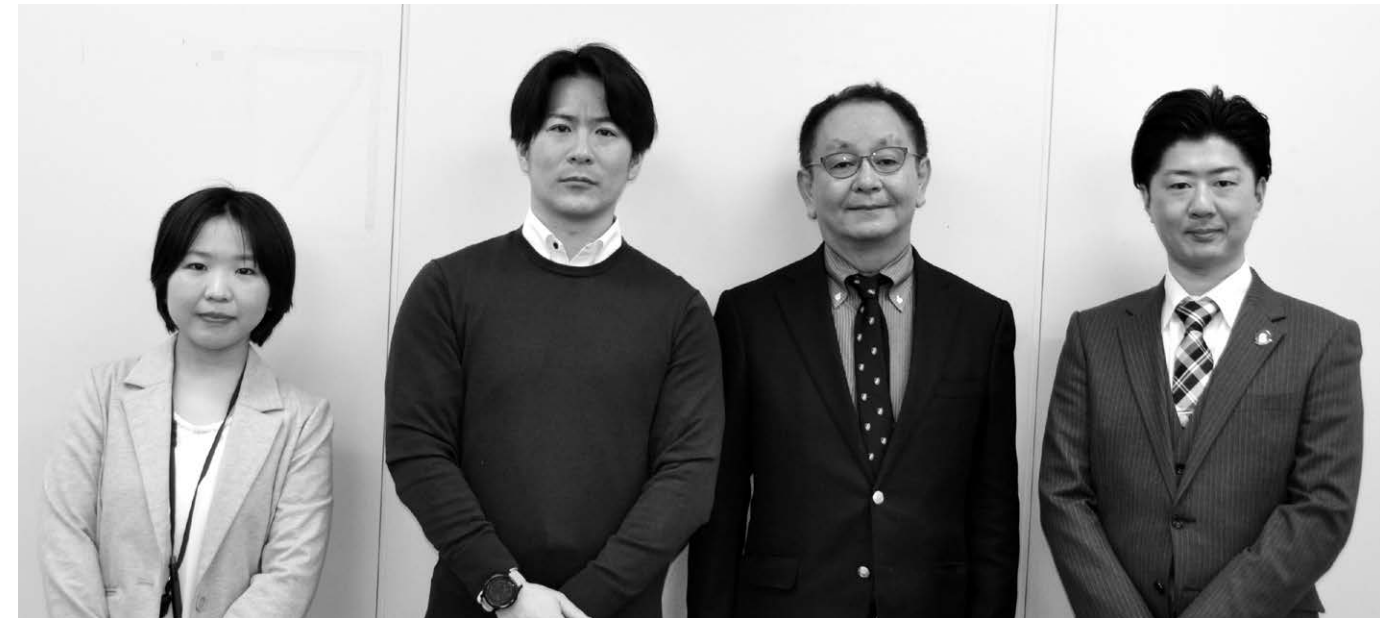
度は区社会福祉施設連絡会加盟施設に呼びかけ、意向調査や施設向け説明会などを進めています。

2つの報告を受けて、新崎先生は「一人でできないときは『助けて』『一緒にやろう』と言える勇気が大切。これは当事者も専門職も同じ。各分野の専

門性がある施設と、地域福祉の専門家である社協が協働すること、互いのいいところを伸ばし、補い合える。これは「手段」であり、「目的」は利用者や地域の方々が笑顔になれること」と総括。両事例ともに、これから施設利用者とともに活動することをめざしていることに触れ、「サービスを受けるだけでなく、『こんなことができる』『主人公になれる』と実感でき

たときに人は元気になれる」とその大切さを強調しました。

参加者からは「公益的な取組みと言えば、組織的で事業化されたものを考えがちだが、身近なところから行動する大切さに気づいた」「発表を聞いて、施設と学校をオンラインでつないで福祉教育もできるかもと思った」などの声が寄せられました。



左から：西成区社協 由浅さん、ヒューマンライツ福祉協会 山脇さん、大阪教育大学 新崎先生、優心会 北野さん

大阪市社会事業施設協議会（事務局：市社協）では、加盟6団体（児童・保育・高齢・生活保護・地域・障がい）の各施設を対象に、（かつて毎月第一水曜日に開催していたことから）「一水会」という学習会を、毎年開催してきました。令和2年度はコロナ禍で中止としましたが、3月8日、2年ぶりにオンラインにより開催。各区社会福祉施設連絡会（事務局：各区社協）の「合同学習会」と位置づけ、各施設や区社協の視聴会場から、施設役職員、社協職員ら約180人が参加しました。（大阪市社会事業施設協議会と市社協による共催）

社会福祉施設はコロナ禍で大きな影響を受けながらも、利用者の安心・安全な暮らしを守るため、日々運営を続けています。「施設を開く」「外に出向く」ことが難しい状況のなかで、何ができるのか。大阪教育大学特任教授の新崎国広先生を講師に迎え、2つの実践事例を共有しました。

コロナ禍で考える

施設と地域のつながり。 公益的な取組み

一水会・区社会福祉施設連絡会合同学習会

報告1 毎朝の見守りは「つながり」のきっかけ

報告者は、平野区にある社会福祉法人優心会の北野智傑さん。同法人では、平成28年に開設したケアプランセンター（マンション1階部分）前のほか、すぐ近くの特別養護老人ホーム前など、交通量の多い3か所です。法人職員が小学生の登校時の見守りをしています。

きっかけは、ケアプランセンター開設前から懇意にしてくれていた方が見守りをされていて、「お手伝いができれば」と声をかけたこと。職員と子どもたちは徐々になじみの関係になり、今では一緒にケアプランセンターの扉を開けて「外出中」「在室中」の看板の出し入れを手伝ってくれるそうです。さらに地域包括支援センターからの声かけで小学校の防災訓練に参加するなど、つながりは広がっています。「コロナでなければ入居者様と一緒に見守りをしよ

報告2 施設・区社協が「ポツチャ」で福祉教育

うと思っていたので、今後ぜひ実現したい」と北野さん。こともたが、施設を身近に感じ、将来介護や福祉の仕事に携わってくれることも目標の一つだと話しました。

「西成区の施設同士でつながる機会に」と「西成ポツチャカップ」を企画・開催していた社会福祉法人ヒューマンライツ福祉協会の山脇功次さん。そんな山脇さんに「障がい者スポーツと一緒に福祉教育ができないか」と、区社協が協働を呼びかけ、小中学校でポツチャを通じて新たなプログラムを実施するようになりしました。

山脇さんは、福祉教育を通じて出会った障がいのある生徒とのエピソードを交えながら、施設が福祉教育に関わる意義について「当事者が主人公になる社会につながる」「近いようで遠い地域と施設に橋を渡す」「み